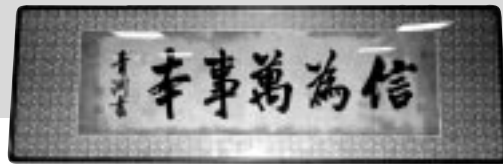


【特集】

伊予銀行 瀬戸内圏で「存在感No.1銀行」へ

瀬戸内圏全域（11府県）を中心とした13都府県に151カ店を擁し、地銀トップの広域店舗網を誇る伊予銀行。財務の健全性に安住せず、常に他行に先駆けて積極的な施策を実行する麻生頭取の強力なリーダーシップと年間500社以上の訪問・全支店臨店という驚異的な行動力で「存在感ナンバーワン」の勢力を築きつつある。



（研修所に掲げられている渋沢栄一翁の扁額）

インタビュー

“現場に神宿る”を信条に 年500社以上訪問

地銀随一の広域店舗網を生かす

伊予銀行 頭取
麻生 俊介



日銀特融第一号の教訓

「頭取は行員に「地銀としての本分を尽くす」と強調しておられるようですが、具体的にはどういうことか

私は毎年、九月一日の創立記念日に、全行員にメッセージを出している。今年は「都銀の動向と地銀の存立意義」と「ペイオフ全面解禁への対応」の二点について強調した。

「都銀の動向云々」というのは、目下メガバンクの大統合が急激に進んでいることを意識したもので、われわれには地銀としての本分があるのだから、それを着実に実践しよう。都銀は個々のお客さまの顔がみえにくいだろ。地銀として「お客さまの顔の見える経営」を実行し、「地域の発展のなかにこそ当行発展の源泉がある」ということを認識しよう。われわれにはそういう特色があるのだから、いまこそ地銀の本分を尽く

す時だということを訴えた。

ペイオフ全面解禁については、私は各支店を回りながら何度も「体力と能力とコンプライアンス」が大事だと。「体力」は経営体力、「能力」は行員の能力のレベルアップ、「コンプライアンス」は組織も個人も事故を起こさないということ。これがペイオフへの王道だと。とりたててペイオフだからということではなく、この三つをキツチリしておくことが大切だということだ。

新しい時代の「堅実経営」といふことか

当行の「堅実経営」の理念は創業時の経緯から発している。当行は明治十一年（一八七八年）の第二十九国立銀行が起源になる。宇和島藩の殿様だった伊達宗城（むねなり）が当時第二代の大蔵卿だった。この人が東京に第一国立銀行をつくった。ところが、それがあまり順調にいかなくて金を集めなけれ